

分担研究報告書

日中活動・街の環境と行動障害のガイドライン策定

研究分担者 田中 義之 東京大学大学院工学系研究科附属
キャンパス・マネジメント研究センター 特任講師

研究要旨

本研究では、強度行動障害のある方が落ち着いて生活し、地域での豊かな暮らしを実現するため、日中活動の場や街の環境と行動障害との関連を調査し、家族や支援者、地域住民とともに街や建築の環境を整えるうえで有効な手法を体系化することを目指す。

令和7年度は2法人を対象に、店舗や公園など地域における外部活動の調査と、一日の移動支援の見学を実施した。結果、地域の中での活動は地域のキーパーソンとの関わりや場所の重ね使いが見られ、移動支援では利用者主導の移動ルート選定や終了時間を決めない支援といった支援手法が見られた。

A. 研究目的

日中活動の場や街の環境と行動障害の関連を明らかにすることで、障害当事者の活動を街へと広げ、生活の質を高めることを目指している。さらに、強度行動障害があっても地域社会への参加を促すことは、支援者や地域住民の価値観の転換につながり、障害者支援の人材確保に寄与する可能性がある。

本研究では、令和6年度までに建物内の環境の調査を行ってきた。これに対し令和7年度は地域の中での具体的な活動の実態を明らかにし、地域との連携や移動支援において法人がどのように地域と関わり活動しているかを探る。

B. 研究方法

令和7年度では、2つの社会福祉法人を対象とし、地域の中で展開している2種類の活動について実態を調査した。

ひとつは地域活動の調査で、施設外の近隣店舗や公園、企業など地域の中での外部活動を調査した。

もう一つは一日の移動支援の見学で、映画館とその周辺を巡る行程において、ルート選択方法や各場所での支援方法の観察を行った。

C. 研究結果

活動の見学とインタビューに基づき、1. 地域の中での外部活動、2. 移動支援における支援者の判断基準に分けて整理する。

C-1 地域の中での外部活動

近隣ラーメン店の開店前手伝い

（運営法人：社会福祉法人千楽）

千葉県浦安市役所近くのラーメン店で、開店前の清掃や調味料補充の手伝いを実施している。このラーメン店は、周辺に公共施設のほかスーパー、商店などが集まった目抜き通りに面しており、商業目的と公共目的の人が集まる立地である。

この立地と店主の人柄から、近隣住民のほか市役所職員や地域のスポーツ活動をする子供達と親など多くの人が訪れ、飲食店でありながら地域の寄合所のような場所となっていた。支援者が食事に通っていたことをきっかけに生活介護事業の活動を受け入れた（図1）。



図4 緑化活動の幅が広がる

図1 ラーメン店と周辺地域との関係

店主が多様な属性の客と接するのと同じように利用者に積極的に話しかけることで、利用者も店主

を中心に周りの人と関係をつくりはじめるなど、やりがいをもって活動することができていた。また、この活動が店主の紹介した近隣店舗へと広がっていく様子が確認された（図2）。

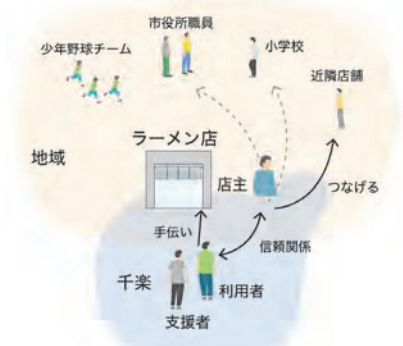


図2 店主を介して繋がる関係

近隣公園の緑化活動

（運営法人：社会福祉法人千楽）

3年前から週2回程度、近隣の大きな公園で自主的な清掃活動を始めていた。その活動を見ていた公園を管理する市民団体から掃除だけではもったいないと声がかかり、緑に触れる地域活動につながった（図3）。



図3 公園での自主的な清掃活動

最初は苗のポット洗いから始まり、慣れてくると落ち葉の掃除や花壇の草取り、さらには地域住民に見てもらえる花壇作りを行うまでに活動が発展した（図4）。花壇作りにおいては地域住民からの反応があり、利用者にとって大きなやりがいとなった。ここでも、市民団体の会長が利用者に対して積極的に話しかけ利用者の意思を尊重しながら活動を進めたことが活動の発展につながったと考えられる。

和來（就労継続支援B型事業所）の運営

（運営法人：社会福祉法人あさみどりの風）

愛知県みよし市役所近くで就労継続支援事業所のうどん店を運営している。開店時に市役所や社会福祉協議会へのアンケートに基づいて（早く食べられるものが良い等）うどんという業態が選ばれた（図5）。

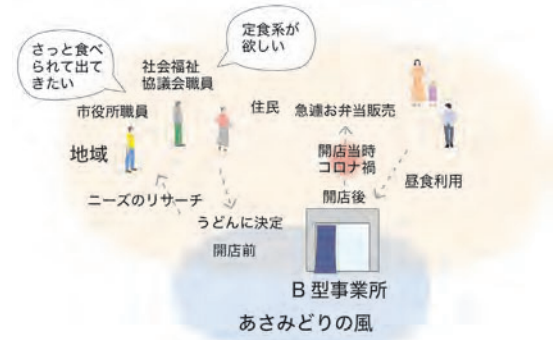


図5 うどん店開店当初

ここでは、ランチ営業終了後に店内を市役所や周辺の公共施設関係者の会議場所等として開放する一方、その間に利用者は近隣の運送会社に出向き運搬用の箱の清掃手伝いや、近隣農家ででのなしの収穫手伝いなど、時間と場所をうまく重ね合わせながら、地域との連携を深めている（図6）。



図6 うどん店内スペースの重ね使い

法人内の場所提供

(運営法人：社会福祉法人あさみどりの風)

法人内の事業所スペースを開放し、地域の高齢者が主体となってカフェを運営している。社会福祉協議会の会議の中で、地域の高齢者が自由に訪れることができるカフェの要望があり、地域交流を進めたい法人の意向と重なり始まった。主催者である地域の高齢者が市内ボランティアのマジシャンや音楽演奏者を招き多様なイベントを開催することで、カフェは地域住民同士のネットワークが広がる活動のハブとなり、生活介護事業所の利用者も地域の高齢者とともにイベントに参加する新たな余暇活動の場となっている(図7)。

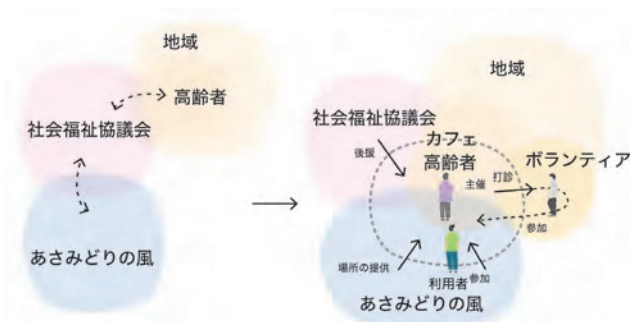


図7 事業所内で地域住民によるカフェ運営

地域と法人との関わりの経緯

社会福祉法人あさみどりの風は44年前に事業所開設後、地域との関わりをつくるために、夏祭りを開催していた。法人敷地内に子供たちが集まり、その子供たちが親を連れてきたことが法人を知ってもらうきっかけとなった。また、支援者自らが地域に住み、支援者が働いている間、支援者の子供が地域の友達を施設に連れてきて遊んでいた(図8)。

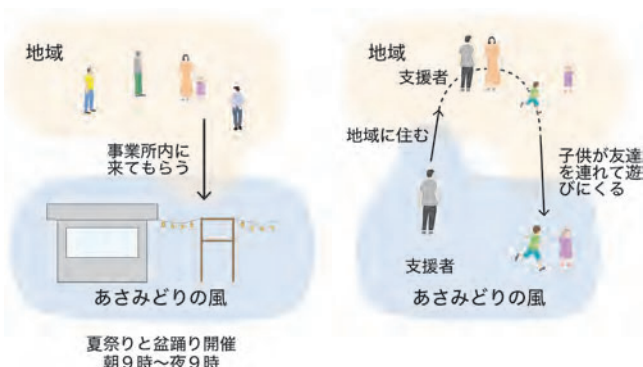


図8 非日常と日常における地域との関わり

子供を介して非日常と日常の両面から地域との接点を継続的に持つことが、法人と地域との関係構築につながったと考えられる(図9)。

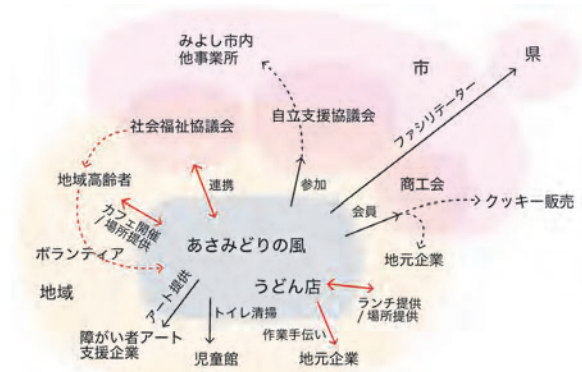


図9 構築されてきた地域との関係

C-2 移動支援における支援者の判断基準

(運営法人：社会福祉法人千楽)

一日の移動支援を見学後、支援者へのインタビューを行い、その回答を基に支援者のルート選択方法や各場所での支援方法について整理した。

日曜日の朝に浦安駅を出発して千葉駅まで電車で移動し、映画鑑賞を経て夕方に帰宅するという工程である(図10)。



図10 予定されていた目的地

1. 千葉駅から映画館

当日の利用者の調子を見極めるため、最短のルートを選び人通りの少ない道を選んでいった。途中にある公園はイベントが行われることが多く、利用者次第で寄り道も選択肢として設定していたが、大音量が流れていたこの日のダンスイベントに利用者は嫌がる様子も興味を示す様子もみられず、支援者は立ち寄らずに映画館へ向かう判断をしていた。

2. 映画鑑賞

「光るもの」を好む利用者のために、星座がテーマの単館上映作品が選ばれた。同作は渋谷でも上映されていたが、利用者にとって初めての体験が複数

あることは負担が大きいいため、来訪経験のある千葉の上映館が選ばれた。

3. 映画館からケバブ店

映画鑑賞後、昼食をとるためにケバブ店へ向かった。事前に現地の写真を見せて説明していたが、空腹で待てない場合は近くのコンビニへ寄るという選択肢が想定されていた。

4. ケバブ店から千葉公園

千葉公園へは市民会館前のまっすぐな道を通っていた。この道は車通りが少なく人も少ないので支援者が距離を置いて安全に歩ける道として唯一確定したルートであった。公園入口に着くと、利用者は余裕がない様子だったため、支援者の判断により近くのカフェで気分を落ち着かせてから入園した。

5. 千葉公園

園内での滞在時間はあらかじめ決めずに、公園に長く滞在してもすぐに移動しても良いスケジュールが組まれていた。これは、時間ではなく利用者の状態で次に向かうタイミングを決めるという積極的な選択である。そして、ベンチで休憩する時が千葉みなと駅か千葉駅かを選ぶ分岐点として設定され、利用者の様子から支援者がどちらの駅でも選択できる余地が確保されていた。

公園内では、利用者が自ら歩き進める間は支援者は後ろから見守り、分かれ道などで迷った時だけ前に出て方向を示すという、通常の支援と逆転した歩き方であった。ベンチで休んだ後は利用者が落ち着いている様子だったため少し距離のある千葉みなと駅へ向かうことになった。

6. 公園から千葉みなと駅・スポーツパー

千葉公園からは、大通りを避けながら利用者の歩く方向に合わせながら駅へ向かった。立ち寄り先のスポーツパー(HUB)が貸切りとの情報を得ると同沿線の別店舗に目的地を変更するなど計画の管理は支援者によって行われていた。

D. 考察

C-1の地域における外部活動およびC-2の移動支援の調査結果について、以下の4点から考察を行う。

D-1. 地域のキーパーソンとの関わり

地域との関わりの中では、浦安のラーメン店主や公園管理の市民団体、地域の高齢者など、家族でも支援者でもない地域のキーパーソンと利用者との

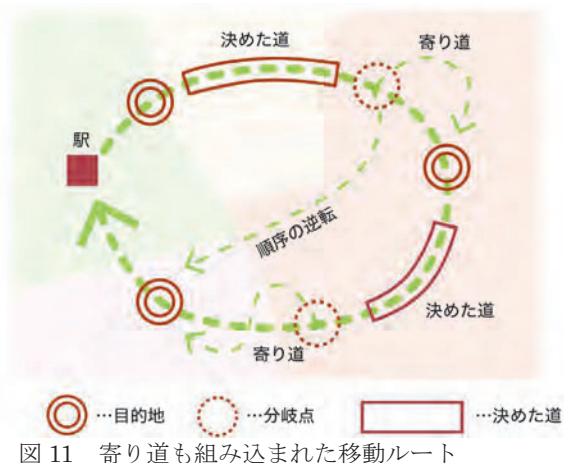
直接的な関わりが見られた。これらのキーパーソンに共通するのは、活動場所の立地条件などから日常的に多様な属性の人と関わりがあり、利用者に対しても同様に自然体で接する姿勢である。こうした関わりが利用者の安心感につながり、活動が地域へさらに広がる契機となっていたと考えられる。地域のキーパーソンの存在とその人物が持つ地域内のネットワークが、障害当事者の活動範囲を広げる上で重要な役割を果たしていると考えられる。

D-2. 場所の重ね使い

うどん店でのランチ終了後に店内を地域の会議場として開放し、その間に利用者が近隣の運送会社や農家での作業に出向く事例や、法人内スペースを地域の高齢者によるカフェとして活用する事例のように、場所と時間を重ね合わせて複数の主体が利用する手法は、限られたリソースの中で地域との接点を生み出す有効な方法である。こうした重ね使いは利用者の活動の場を確保するだけでなく、地域住民にとっても集いの場となることで、両者にとって意義のある地域連携の形と言える。

D-3. 利用者主導の移動ルート

移動支援では、骨格となるルートのみを事前に設定し、それ以外は利用者の興味や状態に応じて行き先を変更するという方法がとられていた。目的地のほかに複数の分岐点と寄り道候補を設けることで、支援者が計画する部分と利用者に委ねる部分を組み合わせた、利用者主導の移動支援が実現されていた(図11)。



D-4 終了時間を決めない豊かな外出支援

千葉公園での滞在時間をあらかじめ定めず、次の

